

# 福岡県環境教育学会

Fukuoka Society of Environmental Education

## ニュースレター

Vol. 68 2022.7.31

- 1 自然、歴史と伝統にあふれる福岡県の魅力を活かした持続可能な開発のための教育 .....1
- 2 第43回例会「水質試験とネイチャーゲームでSDGsを考えよう」報告.....3
- 3 第43回例会に参加して.....5
- 4 SDGsの実現は一人ひとりの行動で実現する。あなたにかかっている .....5
- 5 書評 最近地球が暑くてクマってます .....6
- 6 書評 知る・わかる・伝えるSDGs II エネルギー、しごと、産業と技術・平等・まちづくり .....7

### 【論説】

#### 自然、歴史と伝統にあふれる福岡県の魅力を活かした

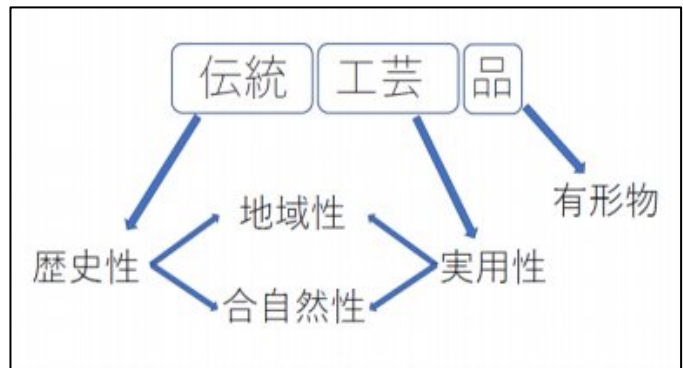
#### 持続可能な開発のための教育

国立青少年教育振興機構・九州大学芸術工学府博士後期課程 樋口 拓

福岡県は、他県に負けない素晴らしい自然、そこに暮らす人々が紡いできた生活文化、歴史と伝統にあふれています。特に筆者は、自然と地域の人々の暮らしが産業として結びつき、人々の生活の中で活用される“伝統工芸品”に大きな魅力と教育における可能性を感じています。なぜなら、伝統工芸品は、地域の自然環境を原資として地域の風土や人々の求めに応じて製作され、日常の用に供されてきたその地の結晶であるからです。つまり、永年その地に存在しているということは、持続可能性を前提とする産業であると考えられ、環境保全意識を涵養する体験活動プログラムとしての可能性も有しているのではないかと考え研究活動に取組みました。そこで本稿では、伝統工芸体験が持つ持続可能な開発のための教育(以下、ESD)としての可能性について触れたいと思います。

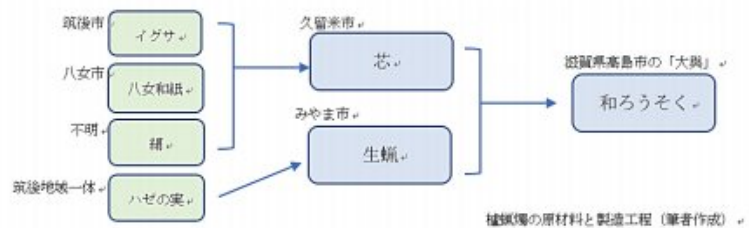
伝統工芸が持つESDの可能性については、ユネスコが2006年に示したFramework for the UNDESD International Implementation Scheme<sup>1</sup>を、今でも拠り所とすることができます。このスキームでは、相互に関連する3つの柱として「環境」「社会」「経済」があり、この3つの均衡をとる視点を養い、行動に結びつけることがESDの役割であり課題であるとしています。さらに、この3つの相互関連は「文化的側面」をその基準あるいは基礎的な土台として提供されることを指摘しています。加えて、文化とは、その地域の人達の存在そのものであり、他者との関係性や振る舞い、或いは信念の背景となり、その人たちの歴史や伝統という文脈で違った行動となり、そうした中で人々は生活を送っているとされています。筆者は、ESD活動には、その地の基底にある歴史や文化、伝統という文脈をしっかりと踏まえる必要があることを付記されているのだと理解しました。2019年国連総会において、ESDはSDGs全体の基底として位置づけられ、達成のカギであるとされましたが、体験活動を基礎としたESDには、青少年がSDGsを単なるラベル認識として終わらせず、その意味を体験的に理解し、持続可能な社会への変容に寄与できる人材として育成する力があると信じています。

ここで「伝統工芸品」がなぜESDの要素を持ち合わせているのかについて考えてみます。国立夜須高原青少年自然の家(以下、当施設)の周辺には魅力的な地域の伝統文化がたくさんあります。例えば、櫛ろうそく、甘木絞、小石原焼、上野焼、久留米餅、八女竹細工、木うそ等々、これらは伝統工芸と位置づけることができ、いくつも存在します。本稿では「櫛ろうそく」について紹介したいのですが、その前に伝統工芸品がなぜESDプログラムの教材となりうるのかについて、前川(2018)<sup>ii</sup>の主張を参考に述べたいと思います。氏は伝統工芸が備える要素をその語の意味から次のように整理しました。“①「伝統」



前川 (2018) . 伝統工芸品研究の現状と展望 林業経済 71 (6) . p. 4 から引用

は「歴史性」を示すものとして、②「工芸」は「有用性」を示すものとして整理できる。さらに「歴史性」と「有用性」からは、使い勝手の良いものへと改良を重ねたこと、そこには使用する条件により特徴が生まれたことから「地域性」を導くことができる。また同じく「歴



植蠟場の原材料と製造工程 (筆者作成)

史性」と「有用性」からは、使用する場所の気象条件や地理条件によって使い勝手を工夫することや、場所によって特徴の異なる地域に賦存している資源を活かしながら有効に活用する精神から「合自然性」を導くことができる。”

こうしたことを青少年が知り、体験することができるようにプログラム化できれば、自身が暮らす地の魅力を知り、また自然と向き合ってきた生活様式からは持続可能な社会の在り方について思考する機会となると考えます。その意味から、伝統工芸品「櫛ろうそく」はESD教材として持続可能性を体現していると考えられます。

櫛ろうそくの原料について見てみます。主原料の生蠟(蠟燭)はハゼノキに実るハゼの実から作ります。ろうそくの芯材には筑後市のイグサ(燈芯草)の髓や八女市の和紙(八女和紙)を用いています。このように、地域の自然資源が収穫、集積、加工され、地場産業として地域経済を支えてきました。福岡県は、明治時代までは我が国を代表するハゼの実の一大産地となっており、ハゼの実から蠟燭を作る製蠟所は、ピーク時(明治27年)には613軒が存在し、経済を潤していたそうです<sup>iii</sup>(櫛ろうそくづくりの最終工程の蠟掛けは現在、滋賀県の職人が担っていますが、最終工程まで県内で完結させ普及してゆこうと取り組んでいる方もいらっしゃいます)。

こうした歴史的背景があり、筑後地方のあぜ道や小川の土手、山間の畑、或いは町中などにハゼノキ並木等の景観を見ることができ、地域特有の景観資源となっています。しかしこの景観は、ハゼノキの用途やかつて地域経済を支えた樹木という歴史的背景などが世代を超えて伝えられず、「ハゼまけする厄介な樹木」として伐採され、激減しています。

ハゼの実を使った精蠟が盛んだった当時の子どもたちと現代の子どもたちの地域に対する意識差の一つには、“シビックプライド”の有無があるように考えています。井形(2019)<sup>iv</sup>は、地方部が抱える課題の根底には、「住民の地域に対する関心の低さ」という大きな課題



上: 甘木絞ワークショップスペースインсталレーション

下左: 櫛ろうそく体験、下右: 櫛ろうそく芯づくり

があることを指摘し、この解決には、「地域に対する愛着と誇り」という意味であるシビックプライドの考え方の重要性を挙げています。筆者はこれへの対応として、伝統工芸品を教材に用いた体験的 ESD の取組みの可能性が挙げられると考えています。

そこで、当施設では、地域の伝統工芸に触れる場や機会を設けることとし、櫛ろうそくづくりや甘木絞り体験等の地域の伝統工芸を採り入れた「夜須高原こども芸術まつり」を令和2年度より開催しています。体験会場は自然を体感できるように森林内にインсталレーションし、職人本人からの指導を受け、伝統工芸品の美しさやそれを担う職人との触れ合いのなかに地域特有の空気観が伝わるように工夫しました。こうした取組みにより地域における自然と人の生業のつながり実感により、地域に対する感性を涵養することを期待しています。

当施設の事業参加者の活動中の発言やアンケートからは、「ハゼノキの存在の意味を知ることができた」、「櫛蠟が世界で認められていることがうれしかった」「染物にはきれいな川と水が必要であることを知った」など、子どもたちやその保護者が地元のすばらしさに気づくことができたことと理解できる発言が多々見られ、当初想定していた効果が期待できるものと考えました。今後も引き続き、プログラムの検討と実践及び効果の検証を進めながら、伝統工芸品と持続可能な開発のための教育について発信してゆきます。

i UNESCO(2006),Framework for the UN DESD International Implementation Scheme,p.p.14-15, <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000148650/PDF/148650eng.pdf.multi>

ii 前川洋平(2018), 伝統工芸品研究の現状と展望, 林業経済 71(6), p.p.4-5

iii 福岡県・福岡県徳用林産振興会(1992), ハゼと木蠟, p.49

iv 井形康太郎,地域学習における児童のシビックプライド形成に関する研究,土木学会論文集 D3(土木計画学), Vol.75, No.5(土木計画学研究・論文集第36巻), p.L181

## 【活動報告】

### 第43回例会「水質試験とネイチャーゲームでSDGsを考えよう」報告

会員 時井 純子

令和4年5月15日(日)、くるめウス(久留米市内にある筑後川防災施設・筑後川中流に位置する。)にて、「水質試験とネイチャーゲームとSDGs」をテーマに掲げ、第43回例会を実施した。参加者は9名であった。

朝10時に集合して、実験室で、3検体(筑後川の支流高良川の上流、下流、みそ汁)の水質測定(色、におい、PH、COD)をした。水質の基礎的な概念を体験した(写真1)。みそ汁のCOD(ほぼ、BOD(生物化学的酸素要求量)と同じと考えてよい)が高い値を示したことなどから、久留米市の川の汚れの原因は生活排水が71%であることを知る。高良川と筑後川本川の水質を昭和53年から水質経年変化をみて下水道の普及で水質が改善したことを知る。下水処理場発行のパンフレットを見ながら、下水処理のメカニズムは、下水に下水量の3~5倍の空気を吹き込み下水中の細菌や微生物が増殖し、下水中の汚れ(=有機物)を食べてくれて下水が処理され、透視度100cm以上の下水処理水になり筑後川に放流されるのを知る。



写真1. 「透視度の測定」円い筒の上からのぞき、十字のマークが見えるまでの水面の長さを計る。



午後からは屋外に出て、雄大な筑後川を見ながら、すがすがしい風を感じ、くもめネイチャーゲームの会指導のもと、ネイチャーゲームを体験。「ネイチャーゲーム」とは、米国のジョセフコーネル氏が考案した五感をつかった自然体験プログラム。「ネイチャーゲーム」をすることによって、子どもの豊かな心をはぐくみ、のびのびと成長するための土台をつくる。園庭や小さな公園などで、五感を使うことで、身近な場所が大自然に変わり、多様な命を感じる感動体験の宝庫になる。河川近くの公園を、3～4人のグループに分かれて、いい匂いがするもの、チクチクするもの、動物の落とし物などを探して、グループ全員で確認するという「フィールドビンゴ」ゲームを楽しんだ。次にどんな音をいくつ聴けたかを数えた。雲の動き



写真2. ネイチャーゲーム「カモフラージュ」

や変化をみる「雲見」というゲーム。次に、二人ペアになって、ある動物になりきり、7メートルほど離れたゴールのところで、リーダーが見せる自然環境(大型台風、猛暑、豪雨、電気製品など)のカードを見みて、それに繋がり(「食うか食われるか」や「すみか・住民」などの生態的なつながりとする。)があると思ったら、一步進む。それを繰り返し、ゴールまで進んでいく「つながりの一步」というゲームを体験し、その動物になりきって、自然環境について自分事として考える機会をもった。最後に生け垣など植物が茂っているところに、人工物を隠しておき、それをいくつ見つけることができるかという「カモフラージュ」ゲームを体験(写真2)。生きものが食べる食べられる関係の中で、擬態という方法で一生懸命に生きていることを知った。

次に、会議室に移り、SDGs(持続可能な開発目標)について考えた。午前中の関連は、目標6「安全な水とトイレを世界中に」について、人間の活動により汚染された水を日本では人類が作った下水処理技術(微生物の増殖による処理)で、安全な水とトイレを自宅で得ることができている。さらに、元久留米市職員だった時井が、昭和55年からやってきた市民活動、「石けんを広め自然環境を守る久留米市民の会」の活動を報告。学校給食調理員の手荒れの原因が食器洗いに使う合成洗剤(石けんとは動植物油脂に苛性カリか苛性ソーダと反応させたもので、それ以外のものを合成洗剤という)であることがわかり、石けんに切り替えたなら、ほとんどの職員の手荒れがなくなった。食用廃油を回収して石けんを作った。石けんは河川で1日で分解されるが、合成洗剤は30日ほどかかるので河川を長く汚すこと。久留米市内の公立の小中学校、保育園では、給食の現場で食器の洗浄は石けんを使用することが決められており、調理員の手荒れがない。時井は環境教育を幼児期にしたいとの思いで、市の保育園が民間に移譲される時、移譲を受けて運営して12年になる。当保育園に就職した調理員さんが、「皮膚科の先生から職業を変えないと手荒れは治らないと言われていたが、この保育園にきて、手荒れがなくなった。自宅の洗剤も石けん変えた」と感謝された。市の労働組合は、市の保育園の民間移譲に反対したが、民間移譲の条件の一つに、食器洗浄は石けんを使うことを約束させたからだ。次に、ネイチャーゲームは目標15「陸の豊かさを守ろう」についての自然の生きものに関心を高める活動です。時井は仕事では、1990年に環境保全室に移動し、環境庁の環境教育研修を受講した。その当時、環境教室は市内28小学校のうち、3校で実施されていた。全校でやらないと効果は上がらないと思い、環境教育副読本を小学5年生全員分作成し、配布。その教本を中心に100分間の環境教室を、小学5年生を講堂に集めていただき、先生は後ろで聞いてもらう形で全校で実施。下水



写真3. 共生の時に使った写真

道に移動するまでの12年間実施した。この12年間は、久留米市内の子ども達は皆、環境教室を受けた結果になるが、その子供たちが今、子育ての世代になっているが、その環境教室の効果を調べたいと思っている。環境教室のキーワードは「循環」「共生」「参加」である。共生の時に使った写真を紹介(写真3)。1993年に市の海外派遣研修制度(自分で企画し研修してくる)で24日間、ドイツ、スウェーデン、イギリスを回るチャンスを得たが、ミュンヘンの科学博物館で、「環境問題Umwelt」という展示があっており、その時に写してきた。「土地の利用状態が少なくなると、動物たちの種類が少なくなってくる。すなわち、生きものはお互いに助け合って生きており、多様性であれば生きやすい社会なんだ」という説得力がある写真だと思う。今後、環境教育をどう進めていくかなどの討論の後、16時に解散した。

### 【参加者感想】

## 第43回例会に参加して

久留米ネイチャーゲームの会 田町 菜穂子

5月15日(日)に第43回環境教育学会の例会に参加しました。

会場は久留米市の筑川防災施設「くるめウス」で、筑後川が見渡せる開放的な場所でした。

午前中は実験室で、筑後川の上流、下流から採取した水、味噌汁を対象に水質実験を行いました。まずは色や透明度を目視し、匂いを嗅ぎました。それぞれの感想を述べた後、登場した「透視度計」に参加者は目が釘付け。それは約1メートルのメモリが書かれた透明な細い円筒なのです。検査水を円筒に入れ、上からのぞき、透明度を計るもの。横から見る透明でも、上から見ると濁って見えない。「フシギだね～」と大人の実験室は盛り上がりました。その後、久留米市の下水道施設や、生活排水の問題についても話を聞きました。かつて学校給食に勤務していた職員の手荒れ問題を解決しようと、合成洗剤ではなく、石鹼を活用した市民活動が久留米市で起こったことも紹介されました。廃油を再利用した洗剤は人の手にも環境にも優しいということでした。

午後からは、ネイチャーゲームを体験。自然の中に隠された匂いや形、声、音を探す「フィールドビンゴ」「音いくつ」、刻一刻と変わる空の様子を見る「雲見」など、普段は忙しくて見逃していた自然現象を堪能しました。また、ほかの動物の身になって環境からの影響を考える「つながりの一歩」、SDGsの観点からとらえる「カモフラージュ」なども体験。筑後川に吹く渡る風を感じながら学ぶ心豊かな時間を過ごすことができました。

### 【オピニオンリーダー】

## SDGsの実現は一人ひとりの行動で実現する。あなたにかかっている

会員 時井純子

2013年ドイツを訪れ、「ドイツでの脱原発の決定」の経緯を学んだ。1998年、緑の党と社会民主党が連合し脱原発を決めていた。2011年3月の福島原発の事故後、メルケル首相は「エネルギーの安全供給に関する倫理委員会」を設置。その答申を受け、2022年までに17基の原発を段階的に停止し再生可能なエネルギーへの転換をはかる工程表をわずか3カ月で決定。これは、ドイツ国民の脱原発への強い意思があったことと、物理学博士号を持つメルケル首相が、御用学者の嘘を見破る能力を持っていたこともあると思う。

「エネルギーの安全供給に関する倫理委員会」の一員、ミランダ・シュラーズ教授の話では、倫理委員会はドイツを代表する有識者17人で構成され、原発賛成と反対派が半々であった。この大切な議論は、市民が討議に参加することが重要であると、会議の内容はテレビで2回11時間放送され150万人が見たとのこと。その時、再生可能エネルギーが

占める割合を(2013年時点で25%であった)2020年までに35%まで伸ばすのがドイツ政府の方針だと聞いたが、2020年現在は46%だ。日本は、2020年までに24%にしようと言っていたが、現在18.5%(2019年)である。

また、政治教育センターを訪れた時、「日本の低い投票率は民主主義の危機だ」と言われた。ドイツの負の歴史と向き合い、安定した民主主義の必要性を説き、市民が民主主義社会の責任を担う力を身に着けることを教えている。さらに、「民主主義の原則は意見の多様性で、ひとつの問題でもいろいろな立場や考えがあることを伝え、一人ひとりが自分の意見を形成できるようにすることがセンターの目的だ」と述べられた。1993年にドイツフライブルグを訪れた時も、小学生の子どもが自分の考えを言えないと学校で嘲笑されるので、物事をしっかり考えて意見をいうことができるとの話を聞いた。

ところで、日本では、CO<sub>2</sub>排出削減のために原子力発電を再稼働するとの報道があるが、安全性が確認されたからと稼働していいのでしょうか。原子力発電は放射性物質が核分裂をおこし、その時に放射線と熱を発生するがその熱で発電するものであり、常に人体に有害な放射線を出しながら発電するもの。広島原子爆弾の投下後4か月以内に16万人が死亡(当時の広島市の人口35万人)、長崎原子爆弾で14万9千人が死亡(当時の長崎市の人口24万人)であったこと等から日本人は放射線の害を知っているはず。また、原発1基は、1日に、広島原爆の3.5倍の放射性廃棄物を発生する。年間1000kgの放射性廃棄物が発生するが、その処理方法はなく、地層処分をするしかない。放射線が半減するのに何億年もかかるのに安全に管理できるのか。今日のウクライナ戦争では、標的にもなることが解かった。早急に再生可能エネルギーである太陽光、風力発電などに切り替え、日本の技術力で世界に貢献する必要がある。

1週間前の5月23日のバイデン大統領の訪日の時、岸田首相は国会の議決もなく、軍事費の増額を約束。2022年度の軍事費はGDP比1.24%の6兆1744億円であるが、このウクライナ戦争の危機を理由に、2%に上げなくてはと政府は言っている。戦争をしないことを宣言している日本に人を殺す兵器が必要でしょうか。目的もなく、アメリカの兵器を爆買いしても軍事力は上がらないし、上がれば軍事攻撃を受ける可能性が高まる。

一方、日本の教育費は、GDPの3.5%で、OECD34か国中では最下位。本当に勉強したい人が大学で学ぶことを保障して、外交や政治力が高い人材を育てる必要がある。北欧諸国、ヨーロッパ諸国の大学授業料は無料である。大学無償化に必要な財源は3兆円で、現在の軍事費の半分である。

各国のSDGs(持続可能な開発目標)達成状況が6月2日に発表されたが、日本は163か国中、昨年の18位から19位に順位を下げた。「つくる責任、つかう責任」が、「深刻な課題がある」という最低評価に転落したからである。

SDGsを達成するには様々な絡み合った問題がいい方向に向かわなければならない。人間が起こした地球温暖化問題、人間の力で解決していきましょう。そのためには、一人ひとりが学び意見を述べ、行動する必要がある。

## 【書評】

### 最近、地球が暑くてクマってます。

#### —シロクマが教えてくれた温暖化時代を幸せに生き抜く方法—

水野敦也+長沼直樹著、江守正多(国立環境研究所)監修、文響社、2021年、1,450円+税

全編カラー。シロクマ親子の写真がテンコ盛り。誰もが、本書を手にとってパラパラとページをめくると「子ども用の本だね」と思うことでしょう。しかし内容を読めると段々と分かってきます。「これはすごい、環境の専門書というより哲学書だ!」と。

それもそのはず。本書は、国立環境研究所の江守正多氏の監修によるもので、シロクマの親子が案内人となり、地球温暖化の現状や対策、様々な情報など専門的な事柄を子どもたちにも分かり易く書かれています。また、私たちにでき

る地球温暖化対策として「選挙に行って投票する」ことだとも言っています。

“なぜ投票に行くことが温暖化対策になるの？”と思われるかもしれませんが、それは温室効果ガス削減に向けて発電方法を転換したり、新たな制度や法律を整備したりするには『国』を動かす必要があるからです。つまり、地球温暖化対策に関する意識の変容が行動変容へとつながるといことなのです。なんとESD的なことなのでしょう！

そして、その目指す世界とは、ジョン・レノンが楽曲「Imagine」で夢見た世界であり、キング牧師が演説「I have a dream」で夢見た世界であるとも書かれています。その他、「ライフスタイル」「ビジネス」「コミュニケーション」の 카테고리別に、私たちにも身近にできる温暖化対策も真面目に、しかも分かりやすく書かれていますので、ご心配なく。(会員:川島伸治)

(初出掲載誌:ふくおか環境カウンセラー協会会報第20号 2022年3月31日)



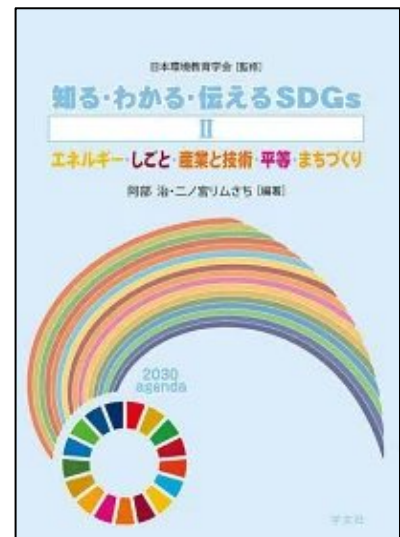
### 【書評】

## 知る・わかる・伝える SDGs II

### エネルギー、しごと、産業と技術・平等・まちづくり

日本環境教育学会監修、阿部治・二ノ宮リムさち編著、学文社、2021年、2,200円＋税

今回紹介する『知る・わかる・伝える SDGs』は全4巻のシリーズものです。(一社)日本環境教育学会の中に研究委員会があり、長年日本の環境教育・ESDの中心にいた阿部治氏が代表となり、「SDGsの教育研究会」を立ち上げました。その成果として、本シリーズの出版にいたりました。評者も大学のゼミの教科書として使用しました。第1巻は第1巻は、貧困・食料・健康・ジェンダー・水と衛生が、第2巻ではエネルギー・しごと・産業と技術・平等・まちづくりが、第3巻では生産と消費・気候変動・海の豊かさ・陸の豊かさ・平和と公正が、第4巻では教育・パートナーシップ・ポストコロナといったタイトルがつけられている。全4巻を通じて特徴はその構成にある。各巻を代表する人物との巻頭対談を入れ、章ごとにひとつのSDGに焦点をあて、前半部は理論的な説明、後半は詳しい実践報告が掲載されている。章は特に各分野の専門家が執筆を担当しており、理論部分では、押さえておきたい「基礎知識」、「教育との関係」、「課題と可能性」といった同じ体裁がとられている。



紙幅の関係上、ここでは、第2巻のみを対象としたい。阿部と長澤恵美子(経団連 SDGs本部統括主幹)の巻頭対談から始まっており、企業でも課題であった外国人労働者問題についても人権デュー・ディリジェンス(関係者の人権リスクについて認識し予防策や軽減策をとること)の仕組みを作っている。各企業では、社員が社会貢献活動を通じて社会的な感度を磨くことに積極的に取り組んでいることを強調し、Society5.0も批判することは簡単だが、ポジティブな影響を拡大し、ネガティブな影響を最小化するにはどうすればいいのか工夫する必要があると長澤は疑問を読者に投げかけている。

環境とのかかわりでは、エネルギーが扱われており、持続可能な社会には化石燃料や原子力の利用を早期に減らし、エネルギー効率化と再生可能エネルギーの普及拡大の推進を急務としている。教育的視点からは、社会全体レベル、担い手レベル(再生可能エネルギー事業者、金融機関、自治体、地域コミュニティ、教育機関)、消費者レベルとい

った3つのレベルでの説明がなされている。最後の課題と可能性では、熱・輸送分野のエネルギー転換に不確実な要素が多く、気候変動問題に対応するうえで科学が要請する速度で転換を進めることができるかといった課題を指摘する一方で、再生エネルギーの成長とコスト低下は著しく、幅広いステークホルダーの学びと対話が追求されれば、今後も導入は飛躍的に行われるとしている。

2030年までに目標がどの程度達成できるのか、福岡市や北九州市、福岡県、日本ならびに世界が試されている。SDGs関連の文献は数多く出版されているが、一般向けに教育的視点を入れたものは少ない。その意味で本シリーズは、環境教育に携わる人々にとって待ち焦がれていたものである。ただし、自らの生活空間である地域資源の特徴を考慮に入れながら、いかに学習を推進していくかの方法や内容については、それぞれの学習者が考えなければならぬ。(会長:三宅博之)

### 福岡県環境教育学会第25回年会

テーマ「みんなでつながるSDGs」

開催期日：2022年（令和4年）8月20日（土）10:00～16:00

開催場所：中村学園大学・短期大学部 4号館2階

詳細は、別紙またはホームページをごらんください

#### 事務局からのお知らせ

##### 1) 学会運営についてのご意見をお寄せ下さい。

運営委員会は年7回程度開かれています。ご意見等ございましたら、事務局総務までお知らせ下さい。

##### 2) 環境教育についての情報をお知らせ下さい。

ニュースレターは年3回程度発行されます。会員にお知らせしたい情報がありましたら、事務局総務まで記事をお送り下さい。

##### 3) 会費納入のお願い。

年会費を未納の方は郵便振替により納入ください。

個人会員：2,000円

学生会員：1,000円

法人会員：15,000円

郵便振替口座番号 01720-3-76825

口座名：福岡県環境教育学会

##### 4) 会員を増やしましょう。

入会手続は、学会ホームページをご確認ください。入会申込と同時に、会費を納入下さい。会費納入確認と運営委員会承認の後、入会手続完了のご連絡を致します。

お問い合わせは事務局会計まで。

#### 福岡県環境教育学会

<http://www.fuku-kan-kyouiku.org>

E-mail: [jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org](mailto:jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org)

#### 事務局

##### 事務局長・総務

〒811-4192 宗像市赤間文教町1-1

福岡教育大学 坂本憲明研究室気付

Tel : 0940-35-1359

E-mail: [jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org](mailto:jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org)

E-mail: [sakamoto@fukuoka-edu.ac.jp](mailto:sakamoto@fukuoka-edu.ac.jp)

##### 会計（会費振込など）

金藤芳就 Tel : 090-4779-3147

E-mail: [jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org](mailto:jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org)

##### 庶務

太田泰弘

E-mail: [jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org](mailto:jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org)

※住所変更の場合は必ずお知らせください。